

要 旨

話し合い活動の中で、よりよい集団決定をする力を高めるためには、互いの意見のよさを生かしながらか議題やめあてに沿ったものを決定しようとする態度が大切であると考え。そこで事前に、目的意識や相手意識を明確にし、話し合いへの意欲を高めるためのミニ学級会を取り入れた。また、話し合いの中では、友達の意見のよいところを認め合う活動や、時間や場所などの条件を基に自分の意見を見直す時間を設定した。その結果、自分や友達の意見のよいところを生かそうとしたり、条件を基に意見を絞り込んでいったりするなど、よりよい集団決定に向かう姿が見られるようになった。

キーワード	話し合い活動 ミニ学級会	比較・検討の充実 認め合う活動	問題意識の共有化 よりよい集団決定
-------	-----------------	--------------------	----------------------

1 研究の目標

友達の思いや願いに気付き、互いの意見のよさを生かして、よりよい集団決定をする力を育成するために、学級活動「(1)学級や学校の生活づくり」における話し合い活動において、互いの意見を比較・検討する場を充実させる指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

近年、生活体験の不足や人間関係の希薄化により、児童の人間関係形成力や社会的規範意識の低下等が問題として挙げられている。これらの課題を踏まえ、新学習指導要領における特別活動の目標に「人間関係」という文言が新たに加わり、よりよい人間関係を築く力の育成が一層重視された。その中でも、話し合い活動においては、生活上の諸問題を解決していく中で、進んで自分の考えを表現したり、他者の思いや願いを理解して集団での意見をまとめたりするなど、よりよい人間関係を構築しながら生活しようとする資質や態度を育成することができると思われる。

本研究では「よりよく判断する力」を、友達の思いや願いに気付き、互いの意見のよさを生かしてよりよい集団決定をする力ととらえた。話し合い活動の中で、友達の意見を聞いて「自分は考えていなかったけどいい考えだ」「あんな考えもあったのか」と気付いたり、「自分と似ている」と比べたりしていくことで、友達の思いや願いを理解することができる。意見の交換を充実させれば、自分の思いや願いを大切にしながらも、友達の思いや願いを受け入れ、互いの意見のよいところを生かしながら話し合いを進めることができるようになると思われる。それらの活動を通して、よりよい人間関係を築くために必要な自己存在感や連帯感を抱くとともに、共感的な態度を身に付けていくこともできるのではないかと考える。

そこで、本研究では、グループの研究課題を受け、学級活動「(1)学級や学校の生活づくり」における話し合い活動において、自分の考えを出し合った後の、互いの意見を比較・検討する場を充実させる指導の在り方について探ることにした。児童が問題意識をもって話し合いに臨み、意見を交換する中で、友達の意見のよさに気付くようになれば、互いに理解し合い、よりよい集団決定をする力が付くのではないかと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

話し合い活動で友達の意見と自分の意見を比較・検討できるように、事前の活動において議題に対しての問題意識の共有化を図り、話し合いの中で互いの意見のよさを認め合う活動と、条件等を基に判断

する時間を設定すれば、友達の思いや願いに気付き、よさを生かしながら、よりよい集団決定をする力が育つであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 文献や研究紀要などを通して、話し合い活動の理論研究を行う。
- (2) アンケートによる実態調査及び抽出児の観察を行い、その結果を分析する。
- (3) 「ミニ学級会」や「きらきらタイム」を設定したり、判断するときのポイントを提示したりすることで、よりよい集団決定をする力が高まったかを検証し、その手立ての有効性を考察する。

5 研究の実際

(1) 文献等による理論研究

新学習指導要領における特別活動には、全体目標だけでなく、新たに規定された各内容の目標にも「人間関係」という文言が示されている。内容の取り扱いにも「人間関係を形成する力を養う活動などを充実するように工夫すること」¹⁾と書かれている。杉田は、望ましい人間関係について、多様な価値観で考え方を認め合い、生かし合いながら、折り合いを付けたり、合意形成を図ったりして、共に生きていくような柔軟で力強いものを築けるようにしなければならないとしている。また、特別活動を中心として、学校生活の中で、人間関係形成能力を身に付けることの必要性を述べ、その中でも話し合いについては「一人でも多くの人間が納得したり、一人でも多くの考えが生かされて答えを見付ける時間」²⁾とし、人間関係形成能力の育成上重要な場であることを示唆している。

橋本は、学級活動の中で、互いの異なる思いや願いをつき合わせ、合意点を探って決定するとき、自分の思いや願いと異なる思いや願いを共に実現することを学んでいくことができるとしている。自分とは異なった考えをもつ友達と話し合いをする中で、互いの思いや願いを生かすにはどうしたらよいか、ということを通して学ぶことで、他にも自分にもよりよく生きていこうとする力が育つとしている。

つまり、話し合い活動は、自分の考えを表現したり、友達の思いや願いに気付いたりすることで、互いの考えや意見の相違点を理解することができる体験の場といえる。意見を交換する中で、互いの思いや願いを察し合い、自分にもみんなにもよい方法はないかという集団決定を行う経験を積み重ねることで、望ましい人間関係を築く資質や態度がはぐくまれていくものと思われる。

そこで、本研究では、互いに意見を比較・検討する場を充実させ、互いの意見のよさを認め合わせることで、よりよい集団決定をする力を高めていきたいと考えた。

(2) 児童の実態

これまでの話し合い活動では、自分の意見を発表するだけで満足し、友達の意見を真剣に聞かなかつたり、思い入れのないままに、多数派の意見に決定してしまつたりすることが多かった。主な原因としては、問題の共有化が十分でなかつたり、友達の意見のよさを生かす方法が身に付いていなかつたりしたためと思われる。

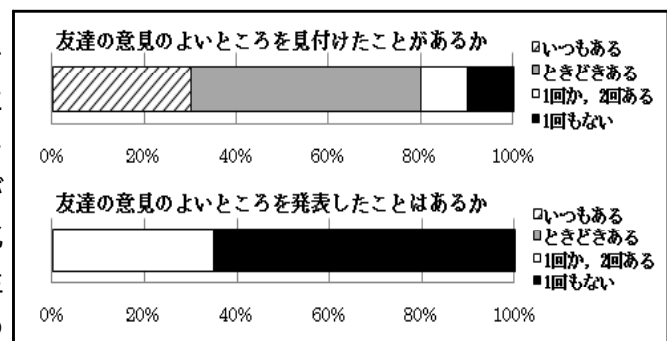


図1 事前の実態調査

対象児童2年生20名に、図1のように実態調査を行った結果からも、友達のよいところに気付いてはいるが、それを表現できていないことが分かった。このことから、互いのよさを伝え、認め合う活動が不十分であったことが考えられる。

(3) 研究の全体構想

互いの意見を比較・検討する場の充実を目指して、「議題に対する問題意識の高まり」「意見を比較・検討する場での思考の深まり」「よりよい集団決定をする力の高まり」という3つの視点から手立てを考え、図2に示した。

ア 議題に対する問題意識を高めるための事前の手立て（視点 ）

議題に対して共有化を図るためには、一人一人の問題意識を高める必要があると考えた。そのためには目的意識や相手意識を明確にし、話し合いへの意欲をもたせることが重要である。そこで、事前にビデオメッセージを見せて相手意識を高め、スケジュール表を提示して話し合いの必要性をもたせた上で、学級会ノートに自分の考えを書く時間を設けた。また、「ミニ学級会」を設定し、目的や相手を意識させながら、アドバイスをさせ合い、自分の意見が議題やめあてに沿っているかを再確認させることで、問題意識が高まるのではないかと考えた。

イ 意見を比較・検討する場での思考を深めるための手立て（視点 ）

話し合いの中で思考を深めるためには、自分の意見に固執するのではなく、友達の意見にも目を向けさせ、よさに気付かせなければならない。そこで、意見を出し合った後に、友達の意見のよいところを認め合う「きらきらタイム」を設定する。自分と友達の考えの共通点や相違点に気付かせることで、互いの考えのよさに気づき、それを生かしながら話し合いができるようになると考えた。

ウ よりよい集団決定をする力を高めるための手立て（視点 ）

集団決定をする前に、最終的な「自分の意見を決める時間」を設けて、自分の意見の見直しをさせる。その際に、判断するときのポイントとして、議題やめあてに沿っているか、決まっている時間や場所でできるかどうか、「きらきらタイム」で出されたよさを生かしているか、を提示する。それを基に、自分の意見を見直すことができれば、よりよい集団決定をする力が高まるのではないかと考えた。

	学習活動	手立て	検証の視点
事前	自分の考えをもつ	ビデオメッセージ・スケジュール表の提示 「ミニ学級会」の設定	ア 議題に対する問題意識の高まり（視点）
	自分の考えを出す		
話し合い	よさを認め合う	「きらきらタイム」の設定	イ 意見を比較・検討する場での思考の深まり（視点）
	自分の意見を見直す	「自分の意見を決める時間」の設定	ウ よりよい集団決定をする力の高まり（視点）
	意見をまとめる		

図2 検証の視点と手立て

(4) 授業の実際と考察

仮説を検証するため、本校2年生1クラス（男子11名、女子9名）において、学級活動「ニコニコスマイルまつりにしよう(検証授業)」と「おじいさん、おばあさんがよるこんでくれるような大成園訪問にしよう(検証授業)」の授業実践を行った。どちらも話し合いの柱として、仲良くなれる、一緒にできる遊びを決めた。本学級では、学級会を「きらきらなかよし会」とよんでいる。

ア 議題に対する問題意識を高めるための事前の手立て（視点 ）

(ア) 学級会ノートに自分の考えを書く活動

目的意識や相手意識を明確にし、活動への意欲をもたせるため、学級会ノートに自分の考えを書かせる際に、一緒に活動する相手である1年生や老人施設の方のビデオメッセージを見せた。楽しみにしているという相手の気持ちを知ったことで、児童全員が「1年生を楽しませてあげたい。」「早く会いたい。待っていているから喜んでもらいたい。」という相手意識をも

つことがとができた。

図3は、学級会ノートに書かれた児童の意見を類別したものである。一緒にできるなど、議題やめあてに沿った理由を書いた意見を「目的意識」、相手が喜ぶなど、相手の立場を考えた理由を書いた意見を「相手意識」、おもしろいなど遊びの

目的意識	相手意識	遊びのよさ	その他の意見
理由の中に、議題やめあてに沿った言葉が入ったもの	理由の中に相手の立場を思いやった言葉が入ったもの	遊びのもつよさ	柱からそれた意見
(例) ・ 仲良くなれる。 ・ 一緒にできる。 ・ たくさん話ができる。 ・ 手をつないだら、もっと仲良くなれる。	(例) ・ 相手が楽しいと思う。 ・ 相手が喜ぶ。 ・ 元気になってほしい。 ・ 笑ってほしい。 ・ 座っていてもできる。	(例) ・ 楽しい。 ・ おもしろい。 ・ みんなが知っている。	遊び以外の意見

図3 意見の内容の類別

もつよさを理由にした意見を「遊びのよさ」、柱からそれた意見を「その他の意見」とした。ビデオメッセージを見せた結果、図4で示したように、目的意識や相手意識を明確にし、議題やめあてに沿って書かれた意見が60%を超えていた。一方、遊びのよさを理由にした意見が15%、その他の意見が18%だった。

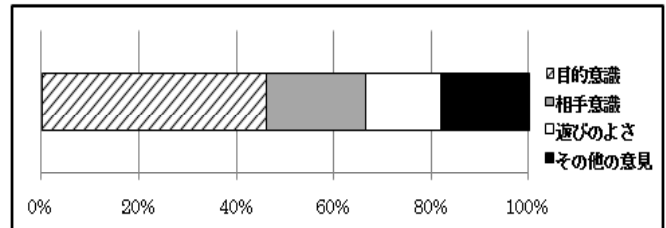


図4 ビデオメッセージ後の意見の内容
児童一人につき2つの意見を書いている

(1) 議題やめあてを再確認し、問題意識を高める「ミニ学級会」

話し合いをする前に、隣同士や4人グループの中で、互いに意見を読み合う「ミニ学級会」を設定した。図5のようなマニュアルを持たせ、〰部のように目的意識や相手意識を表す言葉を参考にさせることで、話し手にも聞き手にも議題やめあてを意識させることができた。

図5 「ミニ学級会」の進め方（一部）

この「ミニ学級会」で、アドバイスを基に自分の意見を見直し、議題からそれている意見を書いていたたり、相手意識や目的意識を表す言葉が十分に表現できていなかったりした児童は、図6のように付加修正を行った。自分の意見を書き直したのは、全体の80%で、「ミニ学級会」のときに聞いた友達の意見のよいところを取り入れ、「おじいさん、おばあさんと一緒に」という言葉を付け加えたり、「座ってできる。」「手だけ動かせばできる。」などお年寄りを気遣う言葉を使ったりして理由を述べている児童が増えた。また「もっともっと元気になってほしいから。」「笑ってほしいから。」という意見もあり、友達と意見を交換したことで目的意識が更に高まった児童もいた。次頁図7から分かるように、目的や相手を意識して述べた意見

図6 「ミニ学級会」後の書き直しの例

が増え、遊びのよさを理由にした意見は減少し、その他の意見は全て修正された。

書き直した理由としては、「座ってできることも入れた方がいいと思ったから。」「おじいさん、おばあさんという言葉を入れた方が伝わると思ったから。」と述べており、友達に聞いてもらったことが、議題やめあてに沿った意見が書けたという安心感につながり、自分の思いを伝えたいという話し合いへの意欲も高まることが分かった。

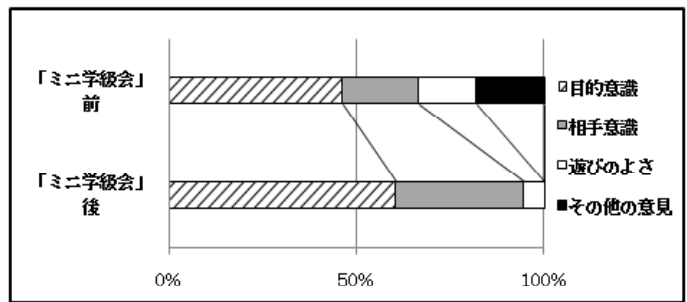


図7 「ミニ学級会」後の理由の変容

(ウ) 視点 のまとめ

事前の手立てを充実したことで、ほとんどの児童が議題やめあてに沿った意見をもって話し合いに臨むことができた。発表に苦手意識をもっている児童も含め、検証授業では全員が発表することができた。「ミニ学級会」後の学級会ノートには、おじいさん、おばあさんと一緒にできるから、という目的意識をもった言葉や体のことを気遣いながらも喜んでもらいたいという相手意識をもった言葉が増え、「ミニ学級会」において、友達と意見を交換し、自分の意見が議題やめあてに沿っているかを見直したことで、目的意識や相手意識が明確になり、議題に対する問題意識を高めることができたと思われる。

イ 意見を比較・検討する場での思考を深めるための手立て（視点）

(ア) よさを認め合う「きらきらタイム」の設定

話し合いの中で、児童が自分の意見に固執せずに、友達の意見のよさに目を向けるようにするために「きらきらタイム」を設定した。意見を出し合わせた後に、図8の学級会ノートに友達の意見の中からよいと思うものを1つとその理由を書かせるようにした。自分の意見から離れたことで、図9のように客観的によさを見付けることができ、互いの意見のよいところを意欲的に発表して、認め合うことができた。そのよさの内容についても、遊びのもつ楽しさよりも、話し合いの議題やめあてに沿ったよさや、相手の立場を考えたよさを述べるできるようになり、思考が深まったと考える。

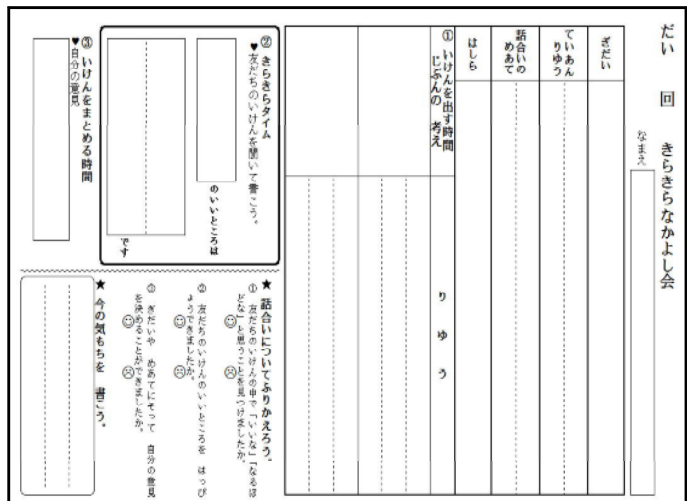


図8 学級会ノート

<p>検証授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「宝探し」のよいところは、あちこちに宝を探して、見付けたら賞品をもらえるところ（遊びのよさ） ・「宝探し」のよいところは、宝を見付けてよい賞品が出たら1年生が喜ぶところ（相手意識） ・「ドッジボール」のよいところは1年生と2年生と一緒にしたらもっと仲良くなれるところ（目的意識） <p>検証授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あやとり」のよいところは、おばあさんに教えてもらったら一緒にできるところ（目的意識） ・「おりがみ」のよいところは、おじいさん、おばあさんが座ってできるところ（相手意識）

図9 「きらきらタイム」で見付けた友達の意見のよいところの主な発言

(イ) 視点 のまとめ

「きらきらタイム」の振り返りの中には「自分の意見はいいと思っていたけど、友達の意見を聞いて、なるほどと思った。」「友達の意見の中に『仲良く、楽しく』と入っていたところがよかつ

た。」「自分の意見をほめてもらってうれしい。」という感想が書かれていた。自分の意見を認めてもらったり、友達の意見のよさを認めたりすることで、多様な意見があることやそれぞれの意見に思いや願いが込められていることに気付くことができたと考えられる。そのため、「意見をまとめる時間」にも、自分の意見に固執するのではなく、議題やめあてに沿っている意見はどれか、できるだけ多くの友達の意見を生かして集団決定をするにはどうしたらよいか、という視点で意見の比較・検討ができるようになり、「きらきらタイム」で出された意見が生かされていた。

ウ よりよい集団決定をする力を高めるための手立て（視点）

(7) よりよい集団決定に向かうための「自分の意見を決める時間」の設定

「きらきらタイム」で、それぞれの意見のよさを出し合った後に、すべての意見の中から、最終的な「自分の意見を決める時間」を設けた。その際、児童が判断するときのポイントとして、議題やめあてに沿っているか、決まっている時間や場所のできるかどうか、「きらきらタイム」で出されたよさを生かしているか、を提示し、よりよい集団決定をするための思考を促した。児童は、「きらきらタイム」での発言を基に、遊びのよさや条件を考えながら、何度も意見を比較・検討して、議題やめあてに沿った意見を決めようと努力していた。

a 検証授業の様子

「意見をまとめる時間」に、「宝さがし」「ドッジボール」「おんぶりレー」「ねことねずみ」という4つの遊びの中から1つに決めることになった。「きらきらタイム」で、遊びのよさを認め合っていたため、反対意見を言うときも「時間が10分しかない」「1年生をおんぶして、転んだら危ない」など、時間や場所を考えたり、安全かどうかを考えたりしながら、条件に基づいて発表していた。図10のような意見の比較・検討が続いた後、最終的に「ねことねずみ」という遊びに決定した。「みんなが知っている」「1、2年生でチームを交ぜたら仲良くなれる」「体育館で10分でできる」など、よいところや条件を基によりよい集団決定をすることができた。

	宝探し	ドッジボール	おんぶりレー	ねことねずみ
きらきらタイム	<ul style="list-style-type: none"> 宝を見つけたら、賞品をもらえる。 いい賞品をもらえたら、1年生が喜ぶ。 一緒に探したら、仲良くなれる。 	<ul style="list-style-type: none"> みんなが譲れば、仲良くなれる。 譲ってあげれば、仲良くなれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 2年生が、1年生をおんぶしたら仲良くなれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生と2年生が交ざってしたら、仲良くなれる。
意見をまとめる時間	<ul style="list-style-type: none"> × 体育館は広すぎる。 × 体育館でかくすのは難しい。 × 時間が10分しかない。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生に譲ってあげたら、もっと仲良くなれる。 × 譲ってもらえなかったら、1年生が悲しむ。 × 顔に当たったら痛い。 	<ul style="list-style-type: none"> おんぶしてあげたら、1年生が喜ぶ。 × 2年生が転ぶと危ない。 × おんぶされているだけだったら、1年生はおもしろくない。 	<ul style="list-style-type: none"> みんなが知っていて、楽しい。 × 走って転ぶと危ない。 1年生と2年生でチームを交ぜたら、仲良くなれる。

図10 検証授業の主な発言

b 検証授業の様子

「ミニ学級会」で、目的意識や相手意識を明確にし、議題やめあてを再確認していた結果、話合いで出された意見は、「風船遊び」「おりがみ」「お手玉」「おえかき」「あやとり」「なぞなぞ」「しりとり」「昔の遊び」で、場所や安全の配慮がされているものばかりだった。そのため、「意見をまとめる時間」のときには、反対意見はなく、「きらきらタイム」で出されたたくさんの意見のよさを生かして、集団決定をしようとする態度が見られた。次頁図10に示したように、友達の思いを察した発言(〜部)や、異なる意見を合わせたり、別のアイデアを出したりして、できるだけたくさんの友達の意見を生かそうとする発言(部)が多くなった。話合いの最後に「風船遊び」と「おりがみ」で多数決を取った結果、「おりがみ」がわずかに少なかったため、教師

が「昔の遊び」の中に入れてはどうかという助言を行った。「昔の遊び」の中に3つの遊びを含めたことで、全員の意見が生かされることになった。

(すべての意見に2, 3個の賛成意見が出たとき)
 A児：ぼくは、「昔の遊び」と「あやとり」と「お手玉」を合わせたらいいと思います。わけは、全部、昔の遊びだからです。
 司会：Aさんの意見に賛成の人は拍手をして下さい。(全員拍手)
 (その後「昔の遊び」に賛成する意見が多くなり、「昔の遊び」は決定)

 (「風船遊び」と「おりがみ」という意見が多くなったとき)
 B児：ぼくは「おりがみ」はプレゼントにあげることになっているので、プレゼントであげればいいと思います。
 C児：ぼくは、Bくんの意見に賛成です。わけは、プレゼントで渡したら、喜んでくれるからです。
 司会：「おりがみ」という意見の人どうですか。
 D児：プレゼントでおりがみは、壁に貼るのだけど、この一緒に遊ぶ「おりがみ」は、あとで自分の部屋にも飾れるのでBさんの意見に反対です。
 教師：Dさんの意見はプレゼントであげるおりがみと、一緒に作るおりがみは違うって意見だけど、どうしますか。
 司会：一緒にしますか？
 (フロアからは一緒にしないという意見。その後、司会からどうやって決めるかという提案があり、十分話し合いをした後なので、多数決をし、「風船遊び」8人、「おりがみ」6人になった。)
 教師：提案があります。「おりがみ」も昔の遊びに入れたら、「おりがみ」もできると思います。
 (フロアから「賛成」という意見。再び、多数決を取って、「おりがみ」も残すことになった。)

図11 検証授業における抽出児の主な発言

(1) 視点 のまとめ

検証授業 と では、「意見をまとめる時間」の発言の内容が違っていた。検証授業 では、時間や場所や安全面を考えながら、どの遊びが議題やめあてに沿っているかを絞り込んでいった。一方、検証授業 は、できるだけ多くの友達の意見を生かすにはどうしたらよいかを考える話し合いとなった。

その原因は、図12に示す検証授業 と の「きらきらタイム」の内容の違いにあると思われる。 の「きらきらタイム」では、遊びのもつ楽しさやおもしろさが挙げられたが、「意見をまとめる時間」に、決まっている時間や場所の条件ではできないという反対意見も多かった。 の「きらきらタイム」

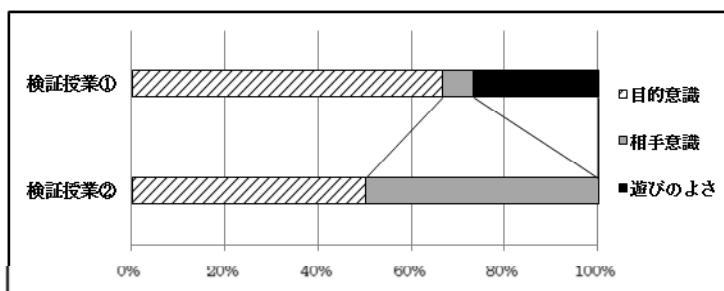


図12 「きらきらタイム」で見付けた遊びのよさの比較 (学級会ノートに書かれた内容)

には目的や相手を意識したよさが挙げられたため、反対意見ではなく、たくさんの友達の意見を生かしたい、という思いが発言に表れていた。その結果、 の話し合いでは、全ての児童の意見が合意形成という形で生かされたので、自分にもよくみんなにもよい集団決定に向かうことができたと考ええる。

エ 全体を通して

今回の検証で設定した「ミニ学級会」と「きらきらタイム」と「自分の意見を決める時間」は、意見の比較・検討の場の充実につながったと考えている。

「ミニ学級会」で、目的意識や相手意識を明確にしたことで、問題意識が高まったことは、児童が書いた学級会ノートの変容からも分かる。例えば、次頁図13であげたC児は、事前に自分の考えをもつことを苦手としていたが、「ミニ学級会」でアドバイスを受けたことで、議題やめあてに沿った意見を書けるようになった。D児は、以前から話し合いに対して意欲的であり議題やめあてに沿った意見をもつことができていたが、友達の意見のよさに気付くようになったことで、自分の意見を見直すよ

うになり、述べている意見に相手意識の高まりが見られた。「ミニ学級会」の設定で、ほとんどの児童が議題やめあてに沿った自分の意見をもって、話し合いに臨むことができた。

「きらきらタイム」では、自分の意見と同じように、友達の意見にも思

	C 児	D 児
検証授業 学級会ノート	意見：ねことねずみ 理由：「ねーねーねずみ」と言っ て、ねこが逃げたら楽しい。	意見：ねことねずみ 理由：みんなが知ってる遊びだし、 1年生と仲良くなれる。
検証授業 きらきらタイム	意見：宝さがし 理由：宝を探したら、楽しい。	意見：宝さがし 理由：1年生と一緒に探したら、 もっと仲良くなれる。
検証授業 学級会ノート	意見：お手玉 理由：おじいさん、おばあさんが 知っている。	意見：おりがみ 理由：みんなもおもしろいし、お じいさん、おばあさんも一 緒にできるし、おもしろい。
検証授業 きらきらタイム	意見：おりがみ 理由：おじいさん、おばあさんが 喜ぶ。	意見：風船遊び 理由：おじいさん、おばあさんも 座ってできる。

図13 抽出児の意見の変容

いや願いが込められていることに気付いたことで、互いの思いや願いを察し合い、できるだけ多くの意見を生かそうとする発言が聞かれるようになった。

また、「自分の意見を決める時間」を設けたことで、友達の意見のよいところと比較して、自分の意見を見直したり、条件を基に意見を絞り込んだりすることができるようになり、よりよい集団決定をする力が高まったのではないかと考える。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 事前に「ミニ学級会」を設定し、目的意識や相手意識を明確にさせ、話し合いへの意欲をもたせたことは、問題意識を高める手立てとして有効だった。

イ 話し合いの中で「きらきらタイム」を設定し、友達の意見のよいところに気付かせたことは、互いの思いや願いを察し合い、よさを生かしながら話し合いを進めさせるのに有効であった。

ウ 「自分の意見を決める時間」に、判断するときのポイントを示したことで、議題やめあてを再認識させることができ、自分や友達の意見のよさや条件を考えながら、よりよい集団決定に向かって意見を絞り込んでいくのに有効な手立てであった。

(2) 今後の課題

今回は、低学年対象ということもあり、「きらきらタイム」と「自分の意見を決める時間」の前に、それぞれ書く時間を設けたことで、話し合いの時間が十分に確保できなかった。発達の段階や実態に応じて、時間の配分を考えていく必要がある。また、よりよい集団決定をするために複数の意見のよさを生かす方法を示すなど、教師の役割についても検討していく必要がある。

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 平成20年 東洋館出版社 p. 6
- 2) 杉田 洋 『よりよい人間関係を築く特別活動』 2009年 図書文化 p. 146

《参考文献》

- ・ 宮川 八岐編著 『平成20年小学校教育課程講座「特別活動」』 2009年 ぎょうせい
- ・ 児島 邦宏・宮川 八岐編著 『学習指導要領の解説と展開 特別活動編』 2008年 教育出版
- ・ 橋本 定男 『子どもが力をつける話し合いの助言』 1997年 明治図書